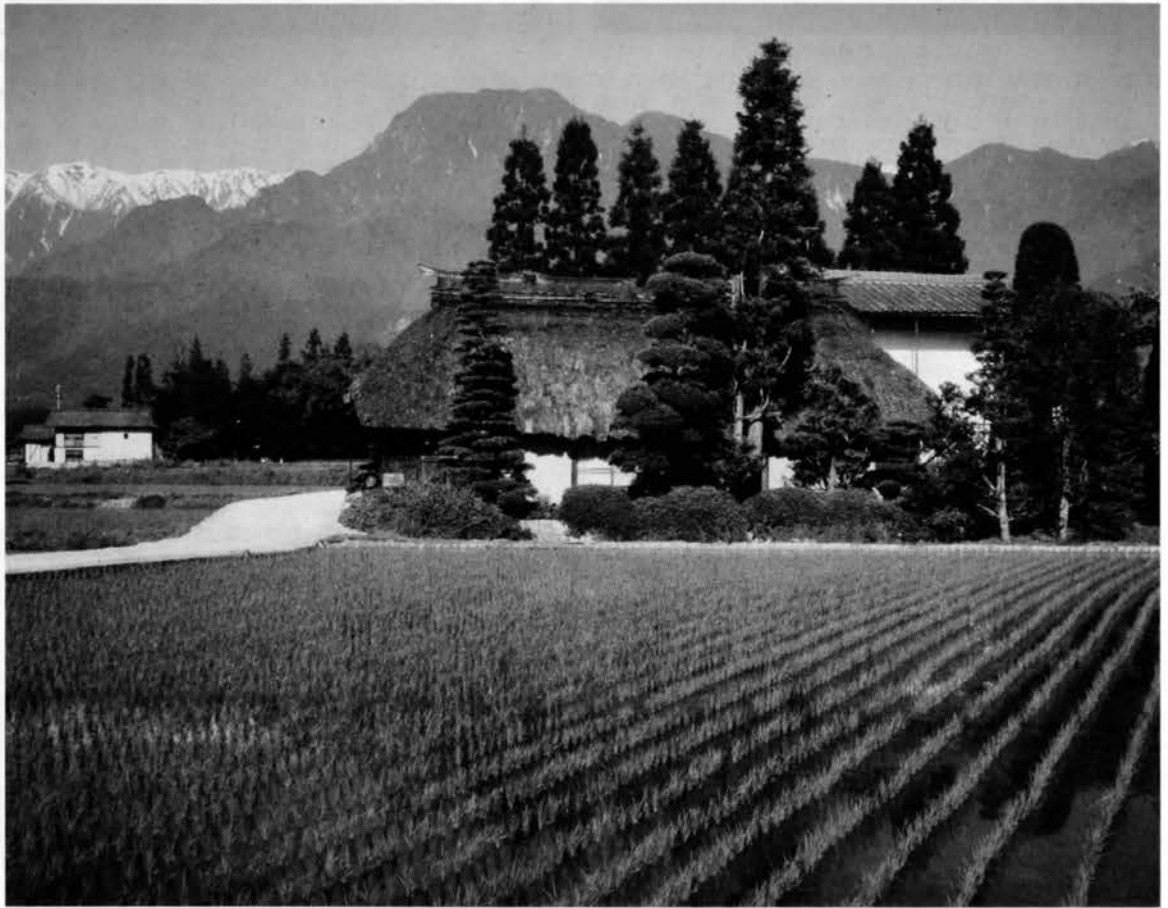


山と博物館

第41巻 第4号 1996年4月25日 大町山岳博物館

特集 安曇野 アルプス山麓の四季—穂苅貞雄 写真展 4/21~5/12



農家と有明山

撮影 穂苅 貞雄

「安曇節」

穂苅 貞雄

「檜や穂高は霞んで見えぬ 見えぬあたりが檜穂高」これは安曇節の一節である。私が父の跡を継ぎ山小屋の経営に携わった昭和三十年代のはじめ頃、私の山小屋の従業員の大半が、安曇平出身者であった。彼らは仕事をしながらよく安曇節を口ずさんでいた。山小屋の最も多忙な八月のお盆を過ぎると、登山客は減少し山小屋は静かになる。その頃、小屋番達の慰労のため酒宴を開くのが恒例となっていた。

当時の貧しい食事情を反映してそれは決して豪華なものではなかったが、歩荷が背負い上げた素焼きの瓶に入った焼酎だけは沢山あった。酒宴が最高潮に入る頃、誰かれとなく安曇節が歌われやがて小屋の前の庭で安曇踊りがはじまる。安曇節の歌声にさそわれ宿泊中の登山者もその踊りの輪に加わることもあり、賑やかな歌声が暗闇の空へ響いていた。高山の夏の夜は肌寒い。酒の酔いがさめる頃、檜頂上へも届く程の大きな歌声も次第に小さくなり安曇踊りはやみ、小屋番達は夫々小屋の中へ入りフトンに入った。彼らは自分の故郷で賑々しく行われている盆踊りをなつかしく思い出しながら床に入ってしまったことだろう。当時の山案内人、山の常連客は殆ど安曇節を歌っていた。大学山岳部員達も安曇節を習っていたが、彼らの歌はどことなくぎこちなく変調安曇節と私達は言った。安曇節は松川村の医師棟葉太生氏が昔から各地で歌われていた野手唄（野手は古語で原野のこと）「チョコサイ節を基に新しい盆踊り唄を作り、自ら家元となつてその普及につとめたものである。私の子供の頃、和服姿の棟葉氏が父の所へたびたび訪ねてきたことを記憶している。今私の手許に昭和九年発行の増訂再版「信州安曇節」がある。この中には父三寿雄撮影の山の写真があり、また「岳の屏風に青田の疊、安曇平は千疊敷」など安曇平の風物を歌ったものが数多くある。棟葉氏はペンネームを出原旭士と言ったが、このたび中島博昭先生の御著書「安曇野」により彼が産科の医師であったので、「出腹処（理）士」をもじったものであることを知り、彼はユーモアのある才人であると感心した次第である。

安曇野によせて

穂 苺 貞 雄

長野県中部に位置する安曇野は、西に三千米の高峰の連なる北アルプスと、東の鉢伏山、美ヶ原、長峰山、大峰高原などの丘陵地帯にはさまれた、その間に南北に広がる田園地帯で、そこには日本の農村の原風景が残り、四季折々に美しい風景を織りなしている。

この安曇野は北アルプスから流れ出ている河川によって造られた扇状地で、その末端部分からきれいな豊富な水が湧き出ているので、この水を利用したワサビ田が各所にある。また古い時代の信仰の対象であった道祖神の宝庫でもある。なおまた文化の香り高い各種のギャラリーが数多くあるので、美しい自然と

共にそうしたものを求めて沢山の人がこの地を訪れている。

春は福寿草、コブシの花に始まり、カタクリ、桜など次々に美しい花が咲き誇る。田植えの頃には、水の入った田圃に白雪の北アルプスの山々が倒映し、夏は一面に青々とした稲が風に揺れ、秋には黄金色の稲穂がたわわに頭を垂れる。北アルプスの連山を背にして広い田園の中に、屋敷林に囲まれた農家が点在する安曇野の風景は、まさに私達の郷愁を呼ぶ日本でも屈指の景勝地である。安曇野という言葉はいかにもロマンチックに響き、この地はこれまで歌に唄われ、また小説の舞台にもなっている。白井吉見の小説「安曇野」の出版、NHKの朝の連続ドラマ「水色の時」の放映などにより、安曇野は一躍日本中に知れわたったり、昭和四十年代はまさに安曇野ブームが到来した。その後昭和六十二年に長野自動車道が豊科町まで開通するや、更に大勢の人々がこの地に訪れるようになった。それらの来訪者は、はじめは豊科、穂高の両町の地域に集中していたが、次第にその周囲にも広がってゆき、安曇野とはどこからどこまでとこの地域がはつきりしていないような状態になった。本来の安曇野とは、南は梓川、北は大町まで、東は犀川、西は北アルプスの麓までの地域を言ったようであるが、現在は安曇野はもっと広範囲にとらえられている。来訪者は豊科、穂高を中心とする南安曇郡

より北安曇郡の大町、白馬方面にも足を伸ばすようになり、この大北地方を北の安曇野とさえ呼ぶようになったのである。ここには立山黒部アルペンルートが入り、また木崎、中綱、青木の仁科三湖があり、更に白馬山麓にはいくつもの雄大なスキー場を持ち、白馬三山、鹿島槍などの秀峰が聳え立つ景勝地である。その山麓の農村は南と比べると、まだ素朴さが残っている。

安曇野は一昔前まで地元では「あづみ平」、あるいは「あづみでいら」と云っていた。安曇野というハイカラな呼称は一部文化人が使っていたようであるが、白井吉見の小説「安曇野」の発表以来一般に安曇野という呼称は定着したのではないかと思われる。この地は太古の時代は泉小太郎の伝説が伝えるように湖沼地帯であったといわれる。その後長い歳月を経て、先人達の営々たる労苦によりこの盆地は形成されたのである。

アルプスから流れ出る河川によって造られた扇状地の上中部分は、川の流れば伏流となり、末端部分に湧出する。その末端部分に造られたワサビ田の中でも大王ワサビ農場は日本一の広さで最も有名で、今も安曇野の観光の中心となっている。扇状地の上中部分では農業用水がなかったため、元来は農耕には適さなかった。江戸時代、付近の十ヶ村の協力により造られたのが、拾ヶ堰で、これによりこの地域の農耕が可能となり、現在は長野県下で一、二を争う米どころとなった。また三郷村から梓川村に広がる広大なリンゴ畑は、昔は小倉官林の松林であったものを、民間が払い下げを受けて開墾したものである。今日の安曇野は先人達の涙と汗の結晶であると言っても過言ではない。そうした時代を経てア

ルプスを背景に南北に広がる田園、農村の素晴らしい景勝地となったのである。しかし、これまでここに住む地元の人達は、安曇野の



こぶしと白馬三山



青田の頃



田植え



斜光

真価を知っていたらどうか、その真価を知らしめたのは、この地を訪れた都会の人達だったのではないかと、思われる。彼らは自分の住む雑踏から離れ、はじめて眺めるアルプスの偉容、その下方に広がる田園風景に目を見はり心を清められていた。そして各地に点在する道祖神巡りをしている彼らの姿を地元の人達が眺め、あまりにもその数の多さに驚き、今更ながら安曇野の真価を知ったのである。近年都会から安曇野へ移住し定着する人が沢山いると聞く。

一見素晴らしいと見える安曇野も、私達カメラマンから見るといろいろと支障物が多いことに気付く。安曇野の開発が進み農村の原風景の茅葺きの家は遠い昔に姿を消し、ケバケバしい原色の屋根が各所に目立ち、更に広大な田園の中に太い舗装された道路が縦横に走り、そこにはコンクリート製の電柱が並び、電線が光って見えることが多い。しかも田園大問題であると痛感した。最近住民達は自ら住む安曇野の自然に目を向けるようになり、自然保護の運動が各地に起こっている。それは安曇野の真価を再認識し、その自然をこれ以上こわしてはならないと言うことがよくわかってきた証である。

各町村ではケバケバしい看板の撤去をはじめ、豊科町では犀川のコハクチョウの飛来地付近を野生生物の生息空間として自然のままにし、健康増進や憩いの場とする。また親子ゾーンと自然観察ゾーンを設定するという豊科町水辺公園計画、あるいは堀金村須砂渡の自然公園計画、奈川村では川づくりに住民の声を聞く懇談会を開くなど。また大町市では昭和電工が発電用水を青木湖、高瀬川から取水しているので河川に水が流れなくなつて

は構造改善事業により同形の四角に区切られ、その畦には白いコンクリートのブロックが目立つ。風景写真撮る私は、そうした障害物ができるだけ避けて撮影しなければならなかった。また、昔よく見かけた棚田も殆んど休耕田となり、草が生い茂っていた。私はその棚田を安曇野から遠く離れた過疎の村でようやく見つけて撮影した。丁度その場にいた老夫婦は「息子達が都会に出て帰ってこないの、後何年棚田の耕作を続けられるかわからない」と心細いことを言った。安曇野の農村は殆どが米作りをしているが、専業農家が少なく兼業農家が大部分である。そして山村はどこも高齢化過疎化が進んでいるので、森林や田畑が荒れている所が多い。私は撮影を通じてこれからの農村は果たしてどうなるか、その将来が心配になった。森林、田畑の荒廃は自然の破壊に通じる。農村問題はただ農村だけのものではなく日本全体で考えるべき大問題であると痛感した。最近住民達は自ら住む安曇野の自然に目を向けるようになり、自然保護の運動が各地に起こっている。それは安曇野の真価を再認識し、その自然をこれ以上こわしてはならないと言うことがよくわかってきた証である。

いる。青木湖でも大幅に減水して魚など生物に悪影響を与えているので、現行の水利権を見直し、湖や河川に水を取り戻すための市民運動が起るなど、各地の自然保護運動は数え切れない。これらの運動が今後成果をあげ、安曇野の自然がこれ以上こわされないようになってもらいたいものだ。

日本全国どこでも多かれ少なかれ開発により自然がなくなつてしまつたが、安曇野もその例外ではない。私はこのたび安曇野の写真撮影のためできる限り各地を見て廻つたところ、幸い残された自然に各所で出合った。そんな所へは季節、天候、時刻を見計つて何回も通つた。

数年前、南の安曇野の山麓一帯に、国営アルプスあつみの公園計画が決定され、一部そのための測量が既に行われた。この山麓は安曇野らしい自然が最もよく残されている所である。私は安曇野の魅力はその自然そのままの姿にあると思つているので、公園は自然を大切にしよう。雄大なアルプスを背景に繰り広げられる農村の素朴な風景そのものが公園であると思う。常日頃私達カメラマンにとって障害になつている田園の中のコンクリート製の電柱や電線がなくなるだけでも、安曇野の自然は生きてくると思ふのだ。僭越な言い方かも知れないが、開発される場所ではできるだけ最少限として開発しない自然を広く残してもらいたい。長い歴史に育まれてきた安曇野の自然がこれ以上壊されぬことを切に祈るものである。

参考文献 「探訪・安曇野」中島博昭著（郷土出版社）「信州安曇野」出原処土著（発行・安曇踊会）「信濃路・信州の美と宝」松



冬の木崎湖



青木湖黎明

本平・安曇野」(信濃路出版)
日本山岳写真協会会員 楡岳山荘・楡沢
ロッチ・雷鳥ヒュッテ経営、松本市在住

山村生活の知恵 (2)

シナの皮

渋谷祥充

一 赤糞の材料

文政八(一八二五)年に四方庄(白馬村)から起こり、それに関わった百姓は三万余りともいわれる大規模な農民一揆は俗に「赤糞騒動」といわれている。「赤糞談(大町市社高橋文書)」の一節には

漫々たる雪を踏み立て、「しな」と言える木の皮に編みたる赤毛の糞を披り、面々棒、鉞、鉞の柄、杵等の道具を掲げ、刃鎌を腰にさし堅固に鎧たる勢共、喚呼はり奇来る」とあり、騒動衆がシナ皮で編んだ赤糞(写真1)を着ていたことを、この騒動の名の由来としている。

シナは日本の固有の広葉樹で、とくに長野県に多く「信濃の国」の語源がシナではないかと言う人さえいる程である。現在では合板にすると表面が滑らかなることから版画の原板などに用いられているが、かつて山村では赤糞に代表されるように木そのものよりも



写真1 シナ糞

(県立歴史博物館の企画展より)

皮の(写真2左・小谷村阿原細沢虎男氏所蔵)の方が利用度が高かったようである。糞の他にも荷縄(写真2右)や牛馬の手綱、など普段の生活には欠かせないものの材料として重要であった。

二 シナ皮製品の生産

明和二(一七六五)年から天保の終り頃までの「小谷温泉諸書付控」(小谷村 太田清輝氏所蔵)は当時の温泉の経営や取決めなどが綴られたものである。この文中に「(前略) 古来ヨリ右湯場小屋を掛け置き候うて、私共四ヶ村入合の薪小屋作り来り、うとわらびくづ柵とちの実等取り夫食に仕り、その他志な皮取りだし百姓作間稼仕り、(後略)」(傍線筆者)

とあり、シナ皮が自給のためだけでなく、作間稼ぎのために採取されたことがわかる。シナ皮が加工され、売られていた事は次の資料でも裏付けられる。明治初期に編纂された「長野県町村誌 南信

編」中の中土村の産物の項には麻や煙草に混じって「シナ網」(シナ網か)が見られ、「凡二十箇 一個は二貫目 同郡大町へ輸送す」と記されている。この製品がどのようなに使われたものなのかはわからないが、いずれにせよ、かなり多くのシナ皮が加工され、出荷されていたことに驚かされる。

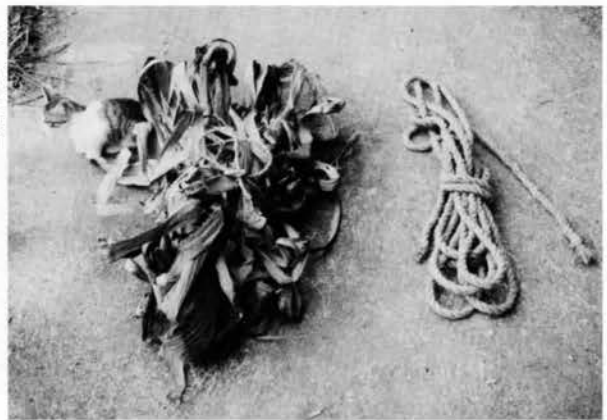


写真2 シナの皮(左)と荷縄

三 加工技術

現在ではほとんど利用されなくなったが、小谷村では昭和三〇年代くらいまではまだシナ皮製品が作られたため、直接加工に携わった人も多い。

シナ皮は夏の暑い時期でなければうまく剥げないのだそうだ。大木では剥くのが大変なため、腕くらいの太さの手頃なものが選ばれ、北小谷の深原では、雪の重みで押されたような曲がった木からは厚い表皮が取れるといわれて好まれた。「シナハギ」といって湾曲した木の下方部から鋭などで切れ目を入れて剥くが、上皮とともに加工に用いる繊維の部分を剥ぐのになかなかコツがいる。

中土では木を切り出してきて、木ごとタネと呼ぶ消雪池に一、二ヶ月浸してから、皮を剥くが、じょうずに剥くと一本の木からかなりの量の皮が取れたという。剥いだ皮は天日干しにして乾燥させ、加工するまでしまっておいた。

シナの加工は主に冬の三月頃の仕事で、水に浸し柔らかくほぐしてからクソツカワ(表皮)を取り除き、燃って糸にしたり、糞のために幅広く繊維を取り出す。荷縄にするには先端がカギ状になった棒が左右両端に付いた長さ七〇センチほどの板を使い、燃った糸を三つ繰りにしていく。この様に、すべてが手作業で行われた。

四 民俗的価値と再生の行方

戦後の経済成長期はそれまでの伝統的な山村の生活様式を大きく変えていったが、シナ皮もそんな中で見向きもされなくなってしまった。しかし、長い年月をかけた人々が自然を取り込み自分の物にしてきた過程には多くの優れた点がある。シナの荷縄は麻などの繊維よりはより丈夫で、しかも大変軽く使いやすい。またシナ糞は、雨に濡れても表面が濡れるだけで、着物まで染み通ることはめったになかったと言う。さらに糞製の糞に比べると乾きが早く、実用性も高かった。

トチノミのように、新しい価値観を与えられていくものもあるが、シナ皮はどうも分が悪いようだ。しかし、シナ皮の持つ柔らかい赤みや手ざわりは現代人が忘れかけている自然のぬくもりを感じさせる。再生への手掛かりは、自然と向きあってきた人よりも、自然に向きつつあり、しかもその中に新たな可能性を見出していく人の手に委ねられていると言ってもよいのではないだろうか。

(長野県民俗の会会員)

山と博物館第41巻第4号

一九九六年四月二十五日発行
発行所 千歳長野県大町市 TEL.0261-2111
印刷所 長野県大町市 山岳博物館
定価 年額 一、五〇〇円(送料共) 切手不可
郵便振替口座番号 05400713353